

中学生が持っている養護教諭に対する印象について

—ある教育学部附属中学校におけるアンケート調査より—

本 田 優 子^{*1}・島 本 揚 子^{*2}・植 村 佳 子^{*3}
福 富 敦 子^{*4}・米 村 健 一^{*1}

On the Impressions of a School Nurse-Teacher Perceived
by Junior High School Students

— A Report of Results Obtained from a Survey in a Faculty
of Education-Affiliated Junior High School —

Yuuko HONDA, Youko SHIMAMOTO, Yoshiko UEMURA,
Atsuko FUKUTOMI and Ken'ichi YONEMURA

We carried out a questionnaire survey in a faculty of education-affiliated junior high school to clarify what kinds of factors are related to formulate the impressions of a school nurse-teacher in the students. The students (n=319) subjected to the present study were first asked about the frequency of utilizing their school health room, and then about the reasons for utilization of school health room, the treatments they received and the feelings they perceived from the school nurse-teacher, at the most impressive occasion of utilization of the school health room since entrance into the school. Analysis of the data revealed the following results.

1. When the degrees of affirmative impressions and negative ones of the school nurse teacher that were perceived at the occasion of utilizing the school health room, were expressed as 'affirmative impression score' and 'negative impression score' respectively, the score of 3.5 points for affirmative impressions was found to be significantly higher than that of 1.3 points for the negative ones.
2. The students with higher frequency of utilizing the school health room tended to show higher scores of the affirmative impressions than those with lower frequency, whereas the students with lower frequency tended to show higher scores of the negative impressions than those with higher frequency.
3. The students with reasons for utilization of the school health room such as 'wanted to ask some questions' and 'wanted to receive medical drugs' showed the highest affirmative impression score, 4.0 points, followed by the score, 3.7 points, which was found in the students with the reasons such as 'wanted to chat with the teacher' and 'wanted to consult with the teacher'.
4. The students who received treatments from the teacher such as 'waiting for a while' and 'patting them gently on the head and hair', i.e., non-verbal treatments, showed higher affirmative impression scores. In contrast, the students who felt as 'having received no treatment from the teacher' showed the lowest affirmative impression scores which were statistically significant in the difference from the mean values for the female students, 3rd year students and the total students subjected to the present study.
5. Both the male and female students who received treatments of 'skinships' showed higher affirmative impression scores, while only the female students who received treatments of 'waiting for a while' and 'talking with the students' showed higher affirmative impression scores.
6. The students who felt as 'having received no treatment from the teacher' showed the highest negative impression scores which were statistically significant in the difference from the mean value for the students at 3rd year.
7. The students with lower 'anxiety scores' showed higher 'affirmative impression scores', while the students with higher 'anxiety scores' showed higher 'negative impression scores'.

^{*1} 養護教育講座

^{*3} 熊本県天草郡新和町立中石小学校

^{*2} 熊本県天草郡河浦町立宮野河内中学校

^{*4} 附属中学校

はじめに

中学生期は悩み多き時代と言われているが、悩み¹⁻³⁾に関する研究も様々行われており、その結果、「将来の進路」や「学校生活・友人や先生との人間関係」、「成績・出欠について」が、最も多い悩みとされている。そして、中学校現場においては、生徒の相談役として養護教諭が選ばれることも多く、瀬口ら⁴⁾によれば、学級担任やその他の教師よりも養護教諭との関わりが最も多いという。また、日本学校保健会⁵⁾の調査では、小学校・中学校・高等学校とも1日の保健室利用者数は年々増加傾向にあり、なかでも中学校における1校1日当たりの保健室平均利用者数は、平成8年の時点で、37.6人に昇る。以上のように、学校内のオアシス的な存在である保健室の利用者数が増加していることは、生徒のストレスがそれだけ増加していることの表れであると考えられる。したがって、保健室経営にあたる養護教諭には、利用しやすい保健室の雰囲気作りが求められる。中学校における養護教諭の生徒への対応については、日本学校保健会の調査⁶⁾をはじめ、対応の種類⁶⁻⁹⁾や養護教諭の判断・考え^{10, 11)}、さらには、相談的対応¹²⁻¹⁴⁾やヘルスカウンセリング¹⁵⁻²²⁾に関するものなど、様々な研究がなされている。しかしながら、保健室の雰囲気に関する研究は、保健室のイメージについて小出ら²³⁾や木幡ら²⁴⁾の調査があるのみである。

保健室の雰囲気に関連すると思われる要因の第一には、養護教諭自身の人柄や振る舞い、次に性別や性格などの生徒自身もつ要因、そして、両者の関係性、最後に保健室自体の物理化学的要因が考えられる。

養護教諭と生徒の関係性のなかでも、生徒がもつ養護教諭に対する印象は、生徒が保健室を気軽に利用できる雰囲気かどうかにかかわっていると考えられるため、実際に生徒が持っている養護教諭に対する印象を把握しておくことは意義があると思われる。しかしながら、養護教諭への印象に関するこれまでの研究は、児童生徒が望む養護教諭の対応についての盛ら²⁵⁾の研究が見受けられるのみである。よって、今回は、中学生を対象に、養護教諭に対する印象に関するアンケート調査を実施し、どのような要因が関連しているか検討した。

研究方法

1. 質問紙による調査の実施

平成8年9月上旬に、K大学教育学部附属中学校の生徒433名を対象に、選択肢を設けた質問紙を用いて、学級担任による集合一斉調査を実施した。回答は無記名とした。全回答のうち、すべての質問に回答してあったもののみを有効回答とし、分析の対象とした。有効回答者総数は319名(有効回答率73.7%)で、その内訳は1年生130名(80.2%)、2年生83名(69.2%)、3年生106名(70.2%)であった。

2. 調査内容および分析方法

調査内容は、(1)保健室利用の頻度、(2)中学校入学時から調査時までの間で特に印象に残っている保健室利用について；①その時の利用理由、②その時の養護教諭の対応、③その時に感じたこと・不安感、および④その時の養護教諭に対する印象に関するものであった。最後に、自由記述の欄を設け、意見・感想などを記述してもらった。

調査内容のうち、(1)保健室利用の頻度については、「よく行く」・「まあまあ行く」・「あまり行かない」・「まったく行かない」の4段階のうちから一つを、生徒の主観的判断に基づいて選択させた。

(2)印象に残っている保健室利用；①その時の利用理由については、日本学校保健会の保健室利用状況平成8年度調査結果⁶⁾をもとに、表1に示すように、13項目の利用理由を設定し、複数回答させた。②その時の養護教諭の対応については、これまでの調査研究^{6-9, 26)}をもとに、表2と表3に示すように、主に言語を用いる対応(言語的対応)8項目、主に言語を用いない対応(非言語的対応)7項目、言語的対応と非言語的対応のどちらにも属しない対応(その他の対応)7項目、そして、何も対応されなかったもの(対応なし)1項目、計23項目を設定し、複数回答させた。③その時に感じたこと・不安感については、中里ら²⁷⁾の作成による状態不安(特定の状況での不安状態)に関する質問紙を用いた。本研究においては生徒に過去の体験を想起させる形式をとらせたため、中里らの質問紙における質問20項目の現在形表現を過去形表現に修正した。そして、中里らの方法に従い、各質問に対して「そのとおりだ」(4点)・「まあそうだ」(3点)・「いくらかそうだ」(2点)・「まったくちがう」(1点)の4段階のうちから一つを選択させ、それらの合計点を求めて各人の不安感の大きさを表す不安得点とした。中里らにより確認されているこの方法の信頼性・妥当性は、

過去形表現に修正して用いても保たれていると仮定した。

また、④その時の養護教諭に対する印象については、長島ら²⁸⁾の作成による Self-Differential の項目を一部使用した。すなわち、この項目は第1因子から第6因子までの6因子で構成されているが、その6因子からそれぞれ2項目ずつ、計12項目を抽出して使用した。これら12項目のうちから、本学部養護教諭養成課程4年生14名に肯定的な印象を表すものと否定的な印象を表すものをそれぞれ3項目ずつ選び出してもらったところ、次の6項目が選び出された。

肯定的な印象を表すもの：明るい、清潔な、楽し
そう

否定的な印象を表すもの：不活発な、軽率な、病
弱な

調査対象の生徒から回答を得た印象に関する12項目のうち、上記の6項目だけを使用して、肯定的な印象および否定的な印象の強さをそれぞれの印象点として求めた。すなわち、それぞれの印象点を、「そのとおりだ」、「まあそうだ」、「いづらかそうだ」、「まったくちがう」の4段階に分けて、順に、4点、3点、2点、1点、と点数化した。

回答率の比較についてはカイ二乗検定を、不安得点の平均値の比較については Student t あるいは Welch の t 検定を用い、いずれも $p < 0.05$ のとき有意差ありとした。データの集計および統計処理には StatView 4.11 (Abacus Concepts, Inc.) を使用した。

結 果

1. 養護教諭に対する印象について

最も強く印象に残っている保健室利用時において、様々な対応を養護教諭から受けて、生徒が養護教諭に対して持った印象を印象点として表してみると、全体では、肯定的印象点が3.5点、否定的印象点が1.3点であり、肯定的印象点が有意 ($P < 0.01$) に高かった (図1)。性別にしてみると、男子が持った印象においては肯定的印象点が3.4点、否定的印象点が1.4点であり、他方、女子においては肯定的印象点が3.6点、否定的印象点が1.3点であった。男子女子ともに肯定的印象点の方が有意 ($P < 0.01$) に高かった (図1)。また、肯定的印象点を男子と女子で比較すると、女子の方が有意 ($P < 0.01$) に高かった。否定的印象点については男子と女子の間に有意差はなかった。

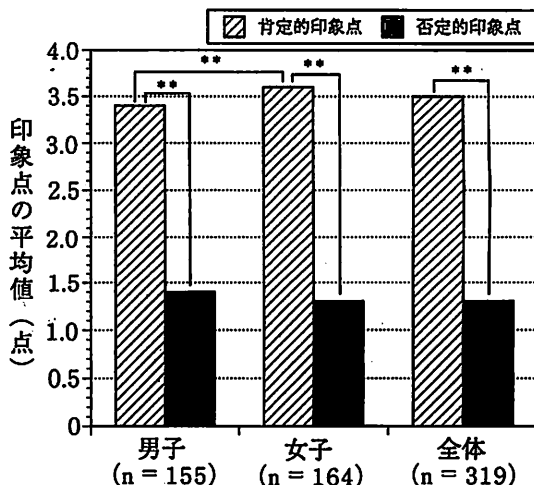


図1 男子、女子、および全体ごとにみた、養護教諭に対する生徒の肯定的印象点と否定的印象点の平均値 (点); (**, $p < 0.01$)

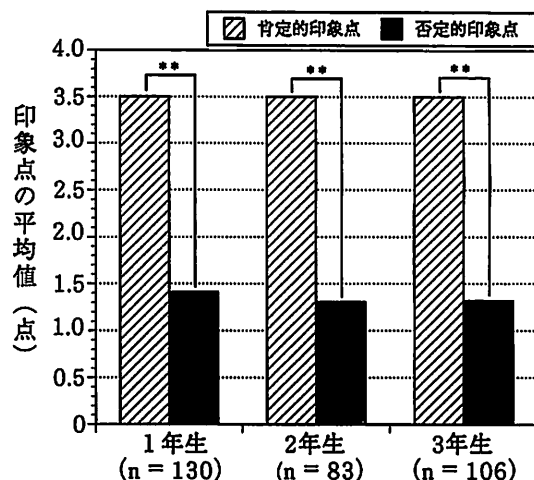


図2 学生ごとにみた、養護教諭に対する生徒の肯定的印象点と否定的印象点の平均値 (点); (**, $p < 0.01$)

同様のことを、各学年ごとにしてみると (図2)、1年生においては肯定的印象点が3.5点、否定的印象点が1.4点であった。2年生と3年生においては、共に、肯定的印象点が3.5点、否定的印象点が1.3点であり、各学年とも肯定的印象点の方が有意 ($P < 0.01$) に高かった。肯定的印象点や否定的印象点のそれぞれには学年間での有意差はなかった。

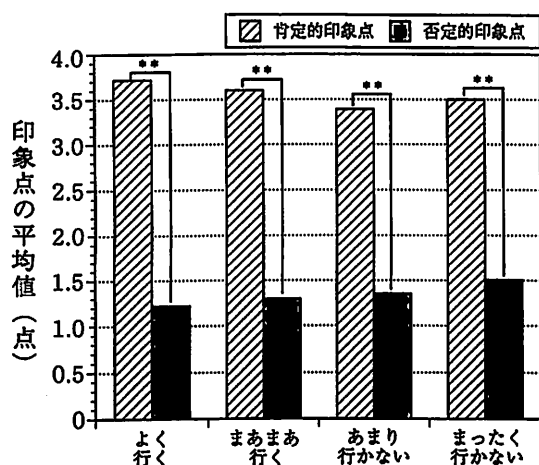


図3 保健室利用の頻度ごとにみた、養護教諭に対する生徒の肯定的印象点と否定的印象点の平均値(点); (**, $p < 0.01$)

2. 保健室利用の頻度と養護教諭に対する印象の関連性について

全体でみて(図3), 肯定的印象点については, 「よく行く」と回答した調査対象群が3.7点, 「まあまあ行く」が3.6点, 「あまり行かない」が3.4点「全く行かない」が3.5点で, 保健室へよく行く生徒はあまり行かない生徒より養護教諭に肯定的な印象を持つ傾向がみられた。

他方, 否定的印象点については, 「よく行く」が1.2点「まあまあ行く」が1.3点, 「あまり行かない」が1.4点, 「全く行かない」が1.5点であり, 利用頻度が低くなるにつれて養護教諭に否定的な印象を持ちやすい傾向がみられた。しかし, 「よく行く」と「全く行かない」との間に有意な差はなかった。

3. 保健室利用の理由と養護教諭に対する印象の関連性について

保健室利用の理由ごとに肯定的印象点と否定的印象点をみると(表1), 全体では, 肯定的印象点については「質問したい」・「薬をもらいに」の利用理由が最高点の4.0点を示し, 次いで「おしゃべり」と「相談したい」が3.7点と高かった。

他方, 否定的印象点については, 「質問したい」が2.3点と最も高く, 次いで「つきそい」が1.6点, 「薬をもらいに」が1.5点の順であった。しかし, 回答者数は「質問したい」が1人, 「薬をもらいたい」が2人のみであったため, この二つの利用理由が養護教諭に対する否定的な印象に関連性があるか否か

表1 保健室利用の理由ごとにみた、養護教諭に対する生徒の肯定的印象点と否定的印象点の平均値(点)

保健室利用の理由	肯定的印象点	否定的印象点
1) 質問したい	4.0	2.3
2) 薬をもらいに	4.0	1.5
3) おしゃべり	3.7	1.3
4) 相談したい	3.7	1.2
5) 体調が悪い	3.5	1.3
6) 思い出せない	3.5	1.4
7) 委員会活動	3.5	1.4
8) 測定	3.5	1.3
9) けがの処置	3.5	1.4
10) 報告	3.3	1.3
11) なんとなく	3.2	1.1
12) つきそい	2.9	1.6
13) その他	3.3	1.4

については, 結論が得られなかった。

4. 養護教諭の対応と養護教諭に対する印象の関連性について

表2は, 印象に残っている保健室利用時に養護教諭から受けたそれぞれの対応ごとに, 生徒の肯定的印象点と否定的印象点をまとめたものである。

全体でみてみると, 肯定的印象点が高かった養護教諭の対応は「待っていてくれた」4.0点, 「頭や髪の毛をなでてくれた」3.9点, 「肩をたたいたり, もんでくれた」3.8点, 「ほほえみかけてくれた」・「うなずいてくれた」3.7点などであり, 非言語的対応に集中していた。全体における肯定的印象点の平均値は3.6点であり, この値と各対応ごとの肯定的印象点の平均値を比較したところ, 「待っていてくれた」4.0点と「頭や髪の毛をなでてくれた」3.9点, および「ほほえみかけてくれた」3.7点はそれぞれ平均値より有意 ($P < 0.01$, および $P < 0.05$) に高く, 「何もされなかった」2.9点は逆に有意 ($P < 0.01$) に低かった。

他方, 否定的印象点が高かったのは「何もされなかった」1.7点, 「待っていてくれた」1.5点, 「けがの処置をしてれた」・「アドバイスをしてくれた」・「声をかけてくれた」1.3点などであった。全体における否定的印象点の平均値は1.3点であったが, この値と各対応ごとの否定的印象点の平均値の間に有意差のあるものはなかった。

表2 養護教諭の対応ごとにみた、養護教諭に対する生徒の肯定的印象点と否定的印象点の
平均値（点）；男子、女子および全体の各対象群ごとのまとめ

養護教諭の対応		男子 (n=155)		女子 (n=164)		全体 (n=319)	
		肯定的	否定的	肯定的	否定的	肯定的	否定的
① 言語的 対応	1) おしゃべりをした	3.5	1.4	3.7	1.3	3.6	1.3
	2) 声をかけてくれた	3.5	1.4	3.6	1.2	3.6	1.3
	3) 話を聞いてくれた	3.5	1.3	3.8 *	1.2	3.7	1.3
	4) 励ましてくれた	3.5	1.4	3.8	1.2	3.6	1.3
	5) アドバイスをして くれた	3.5	1.4	3.9 *	1.3	3.7	1.3
	6) 質問をされた	3.7	1.3	3.6	1.3	3.6	1.3
	7) 倡じてくれた	3.5	1.4	3.7	1.1	3.6	1.3
	8) 認めてくれた	3.6	1.3	3.7	1.1	3.6	1.2
② 非言語的 対応	1) ほほえみかけて くれた	3.6	1.1	3.8	1.2	3.7 *	1.3
	2) うなずいてくれた	3.6	1.4	3.8	1.2	3.7	1.3
	3) そっとしておいて くれた	3.4	1.4	3.6	1.3	3.5	1.3
	4) 手をかけたり握って くれた	3.6	1.1	3.7	1.3	3.7	1.2
	5) 頭や髪の毛をなでて くれた	3.8 **	1.2	4.0 **	1.1	3.9 **	1.1
	6) 肩をたたいたり もんでくれた	3.7 *	1.3	4.0 **	1.0	3.8	1.2
	7) 待っていてくれた	—	—	4.0 *	1.5	4.0 **	1.5
③ その他 の対応	1) 休ませてくれた	3.4	1.3	3.6	1.3	3.5	1.3
	2) けがの処置をして くれた	3.4	1.4	3.8	1.3	3.6	1.3
	3) 温めたり、冷やして くれた	3.5	1.3	3.3	1.1	3.6	1.3
	4) 注意されたり、叱ら れたりしなかった	3.3	1.3	3.8	1.3	3.6	1.3
	5) かまってくれた	3.6 *	1.3	3.8 *	1.1	3.7	1.2
	6) 体温、脈拍などを 測ってくれた	3.3	1.4	3.6	1.4	3.5	1.4
	7) その他	3.3	1.3	3.5	1.2	3.4	1.2
④	1) 何もされなかった	3.2	1.6	2.6 **	1.8	2.9 **	1.7
各対象群の平均値		3.5	1.3	3.7	1.3	3.6	1.3

養護教諭の対応の分類④は、対応なし（1）何もされなかった）を回答した者の平均値。

*, 各対象群の平均値との有意差（ $p < 0.05$ ）；**, 同左（ $p < 0.01$ ）。 —, 回答者なし。

このように、全体では、「処置」や「アドバイス」よりも、「待つ態度」や「スキンシップ」・「ほほえみかけの態度」などの対応の方が生徒は養護教諭に対して肯定的な印象を持ちやすいと考えられる。

男女別にみても、男子において肯定的印象点が高かった養護教諭の対応は「頭や髪の毛をなでてくれた」3.8点、「肩をたたいたり、もんでくれた」・「質問をされた」3.7点、「ほほえみかけてくれた」・「かまってくれた」3.6点などであった。男子の肯定的印象点の平均値3.5点と各対応ごとの平均値の比較において、「頭や髪の毛をなでてくれた」3.8点と「肩をたたいたり、もんでくれた」3.8点・「かまってくれた」3.6点はそれぞれ有意($P<0.01$ と $P<0.05$)に高かった。他方、否定的印象点が高かった養護教諭の対応は「何もされなかった」1.6点、「声をかけてくれた」・「励ましてくれた」・「信じてくれた」・「体温、脈などを測ってくれた」1.4点などであった。しかし、男子の否定的印象点の平均値1.3点と各対応の平均値の間に有意差はなかった。

女子において肯定的印象点が高かった養護教諭の対応は「肩をたたいたり、もんでくれた」・「頭や髪の毛をなでてくれた」・「待っていてくれた」4.0点、「アドバイスをしてくれた」3.9点、「かまってくれた」3.8点などであった。女子の肯定的印象点の平均値3.7点と比較して、「頭や髪の毛をなでてくれた」4.0点、および「肩をたたいたり、もんでくれた」・「待っていてくれた」4.0点、「アドバイスをくれた」3.9点、「かまってくれた」・「話を聞いてくれた」3.8点などは、それぞれ有意($P<0.01$, および $P<0.05$)に高く、「何もされなかった」2.6点は逆に有意($P<0.01$)に低かった。他方、否定的印象点が高かった養護教諭の対応は「何もされなかった」1.8点、「待っていてくれた」1.5点、「体温、脈などを測ってくれた」1.4点などであったが、女子の平均値1.3点との有意差はなかった。

これらのことより、「スキンシップ」や「待つ態度」という対応は、より肯定的な印象を与えること、一方、「何もされなかった」という対応は肯定的な印象を最も与えにくいことが分かった。

以上のことから男女の違いをみても、男女に共通するのは「スキンシップ」の対応を肯定的に受けとめることであり、相違点は、女子に「待つ態度」や「話を聞く態度」などの対応が肯定的に受けとめられていることである。

次に、学年ごとにみても(表3)、1年生において肯定的印象点が高かった養護教諭の対応は

「頭や髪の毛をなでてくれた」・「肩をたたいたり、もんでくれた」・「待っていてくれた」4.0点、「手をかけたり握ってくれた」3.9点、「うなずいてくれた」3.7点などであった。1年生の肯定的印象点の平均値3.6点と比較して、これらの対応ごとの肯定的印象点の平均値は有意($P<0.01$)に高かった。他方、否定的印象点が高かった養護教諭の対応は「何もされなかった」1.7点、「手をかけたり、にぎってくれた」・「体温、脈などを測ってくれた」1.6点、「待っていてくれた」・「声をかけてくれた」1.5点などであったが、1年生の平均値1.4点との間に有意差はなかった。

2年生において、肯定的印象点が高かった養護教諭の対応は「うなずいてくれた」・「かまってくれた」・「ほほえみかけてくれた」・「信じてくれた」・「アドバイスをしてくれた」3.7点などがあり、2年生の肯定的印象点の平均値3.2点と比較して、これらの対応ごとの肯定的印象点の平均値は有意($P<0.01$ または $P<0.05$)に高かった。他方、否定的印象点が高かった養護教諭の対応は「うなずいてくれた」・「そっとしておいてくれた」1.5点、「励ましてくれた」・「アドバイスをしてくれた」・「おしゃべりをした」1.4点などであったが、2年生の平均値1.2点との間に有意差はなかった。

3年生において、肯定的印象点が高かった養護教諭の対応は「頭や髪の毛をなでてくれた」4.0点、「ほほえみかけてくれた」3.9点、「アドバイスをしてくれた」・「かまってくれた」・「質問をされた」3.8点などであった。3年生の肯定的印象点の平均値3.5点と比較して、「ほほえみかけてくれた」3.9点、および「アドバイスをしてくれた」・「かまってくれた」3.8点は有意($P<0.01$, および $P<0.05$)に高かったが、「何もされなかった」2.2点は逆に有意($P<0.01$)に低かった。他方、否定的印象点が高かったのは「何もされなかった」1.9点、「アドバイスをしてくれた」・「おしゃべりをした」・「信じてくれた」・「けがの処置をしてくれた」1.3点などであった。3年生の否定的印象点の平均値1.1点と比較して、「何もされなかった」1.9点は有意($P<0.01$)に高かった。

以上のことから学年別の相違点をみても、1年生は「スキンシップ」に、2年生は「ほほえみかけ」や「うなずき」に、3年生は「ほほえみかけ」や「アドバイス」に肯定的な印象を持ちやすいといえる。特に3年生では「何もされなかった」対応は否定的な印象にはならないまでも、肯定的な印象が最も薄くなると考えられる。

表3 養護教諭の対応ごとにみた、養護教諭に対する生徒の肯定的印象点と否定的印象点の平均値(点)；各学年ごとのまとめ

養護教諭の対応		1年生 (n=130)		2年生 (n=83)		3年生 (n=106)	
		肯定的	否定的	肯定的	否定的	肯定的	否定的
① 言語的対応	1) おしゃべりをした	3.6	1.3	3.6 *	1.4	3.7	1.3
	2) 声をかけてくれた	3.5	1.5	3.6 *	1.2	3.6	1.2
	3) 話を聞いてくれた	3.7	1.2	3.7 *	1.3	3.7	1.2
	4) 励ましてくれた	3.6	1.3	3.5	1.4	3.7	1.2
	5) アドバイスをしてくれた	3.6	1.3	3.7	1.4	3.8 *	1.3
	6) 質問をされた	3.5	1.4	3.7 *	1.2	3.8	1.2
	7) 悩じてくれた	3.6	1.2	3.7 **	1.3	3.6	1.3
	8) 認めてくれた	3.6	1.2	3.6	1.3	3.6	1.2
② 非言語的対応	1) ほほえみかけてくれた	3.7	1.4	3.7 **	1.3	3.9 **	1.2
	2) うなずいてくれた	3.7 **	1.3	3.7 **	1.5	3.8	1.2
	3) そっとしておいてくれた	3.5	1.4	3.5	1.5	3.5	1.2
	4) 手をかけたり握ってくれた	3.9 **	1.6	3.3	1.2	3.7	1.0
	5) 頭や髪の毛をなでてくれた	4.0 **	1.3	3.0	1.0	4.0	1.0
	6) 肩をたたいたりもんでくれた	4.0 **	1.2	—	—	3.6	1.1
	7) 待っていてくれた	4.0 **	1.5	—	—	—	—
③ その他の対応	1) 休ませてくれた	3.6	1.5	3.5	1.3	3.5	1.2
	2) けがの処置をしてくれた	3.6	1.4	3.4	1.3	3.6	1.3
	3) 温めたり、冷やしてくれた	3.6	1.3	3.5	1.3	3.6	1.2
	4) 注意されたり、叱られたりしなかった	3.6	1.3	3.6	1.3	3.7	1.2
	5) かまってくれた	3.7	1.3	3.7 *	1.3	3.8 *	1.1
	6) 体温、脈拍などを測ってくれた	3.4	1.6	3.6	1.3	3.4	1.1
	7) その他	3.3	1.3	3.4	1.1	3.8	1.1
④	1) 何もされなかった	3.7	1.7	3.0	1.3	2.2 **	1.9 **
各対象群の平均値		3.6	1.4	3.2	1.2	3.5	1.1

養護教諭の対応の分類④は、対応なし(1)何もされなかった)を回答した者の平均値。

*, 各対象群の平均値との有意差 ($p < 0.05$) ; **, 同左 ($p < 0.01$)。 —, 回答者なし。

5. 不安得点の高低群と養護教諭に対する印象の関連性について

さらに、不安得点がそれぞれの対象群における（平均値＋標準偏差）より高い群と（平均値－標準偏差）より低い群の2者間で、養護教諭から受けた対応の分類ごとにみた割合について比較してみた。

表4に示すように、不安得点の低い群の養護教諭に対する肯定的印象点は、それぞれ、全体3.9点、男子3.9点、女子3.9点、1年生3.8点、2年生4.0点、3年生3.9点と高く、不安得点の高い群では、全体3.0点、男子2.9点、女子3.1点、1年生2.9点、2年生3.0点、3年生2.8点と低く、両者間に有意差（ $P<0.01$ ）があった。

他方、不安得点の低い群の養護教諭に対する否定的印象点は、それぞれ、全体1.2点、男子1.2点、女子1.2点、1年生1.4点、2年生1.1点、3年生1.1点と低く、不安得点の高い群では、全体1.6点、男子1.6点、女子1.6点、1年生1.5点、2年生1.5点、3年生1.6点と高かった。全体、女子および3年生において、両者間に有意差（ $P<0.01$ または $P<0.05$ ）があった。

このように、不安得点の低い生徒は不安得点の高い生徒に比べて肯定的な印象を持ち、全体や女子、3年生においては不安得点の高い生徒は不安得点の低い生徒に比べて否定的な印象を持つことが分かった。

表4 不安得点の高低群ごとにみた、養護教諭に対する生徒の印象点の平均値（点）

対象群	不安得点の高低群（n）	肯定的印象点	否定的印象点
男子	不安得点の高い群（25）	2.9 **	1.6
	不安得点の低い群（25）	3.9	1.2
女子	不安得点の高い群（27）	3.1 **	1.6 *
	不安得点の低い群（26）	3.9	1.2
1年生	不安得点の高い群（17）	2.9 **	1.5
	不安得点の低い群（23）	3.8	1.4
2年生	不安得点の高い群（15）	3.0 **	1.5
	不安得点の低い群（10）	4.0	1.1
3年生	不安得点の高い群（17）	2.8 **	1.6 *
	不安得点の低い群（19）	3.9	1.1
全体	不安得点の高い群（52）	3.0 **	1.6 **
	不安得点の低い群（52）	3.9	1.2

*, 不安得点の低い群との有意差（ $p<0.05$ ）； **, 同左（ $p<0.01$ ）。

6. 意見・感想などの自由記述について

養護教諭に対する印象として、全体対象者433名のうち150名（34.6%）が、「優しい」あるいは「楽しい」・「明るい」・「安心できる」といった肯定的な印象を記述しており、記述内容としては最も多かった。次に多かったのは、記述がまったくない、空欄のままのもので、全体の120名（27.7%）であった。また、「特にない」、あるいは、ただ単に「ない」という記述も多く、60名（13.9%）ほどいた。保健室へは「ほとんど行ったことがないので」と理由を述べて、養護教諭については「よくわからない」と述べた者も9名いた。

他方、否定的な印象に属するものとして、例数は少ないながらも、「とてもいろいろな事をしているけど、なんかそっけない感じをもつ」1名・「人によって態度が違う」1名・「気分が悪いとき、うそだとまちがえて休ませてくれなかった」1名などの記述があった。

考 察

1. 養護教諭に対する印象について

生徒が持つ養護教諭に対する印象を肯定的印象点や否定的印象点として表してみたところ、女子の方が男子より肯定的な印象を持っていることが分かった。瀬口らの研究⁴⁾でも、養護教諭に対して、やさしい、あたたかいというイメージを女子が男子よりも多く持っていることが報告されている。また、学年間では肯定的印象点に有意差がなく、どの学年の生徒も同じくらいに養護教諭に対して肯定的な印象を持てることが分かった。これは、日常における、あるいは最も強く印象に残っている保健室利用時における養護教諭の対応が良かったことによるものと思われる。小出らの研究²⁰⁾においては、「養護教諭に相談したことがあるか」という問いに対する回答数は女子が男子の2倍であり、養護教諭に相談した理由は「話を聞いてもらいやすいから」がほとんどであったという調査結果が報告されている。さらに、小出ら²⁰⁾によれば、保健室に対してのイメージとして、保健室は“清潔”“ほっとする”との回答が多かったが、一方では“自分とは無関係”“近寄りにくい”との回答もかなりあった。また、保健室のイメージと望む養護教諭像との間に密接な関連性もあった。以上のことから、今回、男子よりも女子の方が養護教諭に肯定的な印象を強く持っていたのは、養護教諭への「相談しやすい・話しやすい」というイメージと関連があったと考えられる。

2. 保健室利用の頻度と養護教諭に対する印象の関連性について

全体で「あまり行かない」と答えた生徒が多かったが、女子は男子よりも、また、高学年になるにつれて、保健室へ行く頻度が高くなることが報告されている⁸⁾。利用頻度が高い生徒ほど「なんとなく」・「おしゃべり」・「相談」などの割合が多い傾向にあり、養護教諭に肯定的な印象を持つことに関連性があると思われる。つまり、利用頻度が高い生徒ほど、養護教諭との信頼関係が深まるので、養護教諭に対して肯定的な印象をより多く持つようになるといえる。逆に、養護教諭への印象が肯定的であるので保健室によく行くようになるともいえる⁹⁾。他方、保健室へ日常はまったく行かない生徒ほど、必要のある時しか保健室へ行かず、養護教諭との接点が少ないので、肯定的印象点が低くなり、したがって利用頻度も低くなるのではないと思われる。しかし、利用頻度が低いからといって養護教諭に否定的な印象を持つとはいえない。

3. 保健室利用の理由と養護教諭に対する印象の関連性について

保健室利用の理由ごとに養護教諭に対する生徒の印象点についてみると、肯定的印象点は「質問したい」・「薬をもらいに」・「おしゃべり」の順で高かった。つまり、このような利用理由を持って保健室を訪れた生徒に養護教諭が十分対応したことを示唆している。他方、否定的印象点は「質問したい」・「つきそい」・「薬をもらいに」の順で高かった。しかし、「質問したい」は1人、「薬をもらいに」は2人しかおらず、今回の調査結果のみからはこの点に関する結論は得られなかった。

4. 養護教諭の対応と養護教諭に対する印象の関連性について

全体でみた場合、「処置」や「アドバイス」などよりも「待つ態度」や「スキンシップ、ほほえみかけの態度」の方が生徒は養護教諭に対して肯定的な印象を持ちやすいと考えられる。これは小出¹⁰⁾の研究に、「話を聞いてくれる」という養護教諭の対応を望む者に保健室が「ほっとする」というイメージを持つ者が多いとあることと一致している。

また、男子女子に共通するのは、「スキンシップ」の対応を肯定的に受けとめることである。他方、相違点は、女子に「待つ態度」や「話を聞く態度」の対応が肯定的に受けとられていることである。女子

は男子に比べて、「おしゃべり」をしに保健室へ来る生徒が多く、「話を聞いてもらいたい」というニーズを持っており、養護教諭がそのニーズに十分応えることで生徒は自分のニーズを満たされ、ひいては、肯定的な印象をより多く持つようになると思われる。また、学年の違いについて考察すると、学年が増すごとに「スキンシップ」・「ほほえみかけ」・「うなずき」などの対応から、生徒に目を向けて「生徒を認める」、さらに「アドバイスをする」という対応により多くの肯定的な印象を持ってくるようになるといえる。特に、3年生では「何もされなかった」という対応は否定的な印象にはならないまでも、肯定的な印象を最も薄くすると考えられる。

5. 不安得点の高低群と養護教諭に対する印象の関連性について

不安得点の低い生徒は不安得点の高い生徒に比べて肯定的印象点が高かった。さらに、全体、女子および3年生においては、不安得点の高い生徒は不安得点の低い生徒に比べて否定的印象点が高かった。

一方、養護教諭の対応と養護教諭に対する印象の関連性についての分析結果として上述したとおり、生徒が養護教諭に対して肯定的な印象を持つ対応として「頭や髪の毛をなでてくれた」・「待っていてくれた」・「ほほえみかけてくれた」・「肩をたたいたり、もんでくれた」などがあったが、これらは生徒の不安感を和らげる対応でもあり、不安得点の低い生徒はこれらの対応に敏感に反応し、養護教諭に対して肯定的な印象を持つようになると思われる。

6. 意見・感想などの自由記述について

養護教諭に対する印象として、最も多かったのは、当該校の養護教諭が「優しい」という肯定的な印象を記述したものであった。これは、養護教諭が日常的に、あるいは、最も印象に残っている保健室利用時に、生徒のニーズに対して適切に対応していることの表れであろう。次に多かったのは「空欄のままのもの」あるいは「特にない」という回答であったが、その原因として、全体的にアンケート項目が多く、自由記述する時間的余裕があまりなかったことが考えられる。もし、時間的余裕が十分あったにもかかわらずそのような回答になったとすれば、養護教諭に対する強い肯定的な印象を持っていないことの表れであるとも考えられる。また、はっきりとした否定的な印象として、「なんかそっけない感じがもつ」・「人によって態度が違う」・「気分が悪いとき、

うそだとまちがえて休ませてくれなかった」などの記述があった。このような否定的な印象の記述は例数は少なかったが、1例もいなくなるように日常的な努力が必要である。まずは「声かけ・語りかけ」あるいは「聞く・認める」ことにより、生徒の信頼感を得ることが重要と考えられる。

以上のような今回の調査結果から、養護教諭に対する生徒の印象は、保健室利用の頻度や理由、養護教諭の対応、あるいは対応を受けた後の不安感などに関連していることが明らかになった。しかし、生徒が持つ養護教諭に対する印象に関連する要因として、上記の要因の他、養護教諭のパーソナリティ、保健室の雰囲気、生徒自身の性格などが考えられる。今後、このような要因との関連性についても調査・研究を深めていく必要がある。また、今回の研究結果は、ある教育学部附属中学校の1例のみの調査によるものであり、その結果を一般化するためには、今後、一般の公立学校や私立学校も含めた調査へと拡大していく必要がある。

ま と め

中学生が持つ養護教諭に対する印象にはどのような要因が関連しているのかを明らかにするために、ある教育学部附属中学校の生徒を対象にアンケート調査を実施した。調査対象者に、まず、保健室の利用頻度について尋ね、ついで、中学入学以来最も印象に残っている保健室利用を取り挙げさせ、その時の利用の理由、その時に養護教諭から受けた対応、その時に感じたこと・不安感、および養護教諭に対する印象などについて回答させた。データの分析により以下のような結果が得られた。

1. 養護教諭に対する印象を肯定的印象点および否定的印象点として表したところ、全体において、肯定的印象点が3.5点、否定的印象点が1.3点であり、肯定的印象点が有意に高かった。
2. 保健室へよく行く生徒はあまり行かない生徒より養護教諭に肯定的な印象を持つ傾向がみられ、他方、利用頻度が低くなるにつれて養護教諭に否定的な印象を持ちやすい傾向がみられた。
3. 保健室利用の理由ごとに肯定的印象点をみると、全体では、「質問したい」・「薬をもらいに」の利用の理由が最高点の4.0点を示し、次いで「おしゃべり」と「相談したい」が3.7点と高かった。
4. 肯定的印象点が高かった養護教諭の対応は、全体でみた場合、「待っていてくれた」・「頭や髪

毛をなでてくれた」などの非言語的対応であった。逆に、肯定的印象点が低かった対応は「何もされなかった」対応であり、女子、3年生および全体において、それぞれの対象群の平均値より有意に低かった。

5. 男女に共通して「スキンシップ」の対応は肯定的に受けとめられ、他方、相違点として、女子に「待つ態度」や「話を聞く態度」などの対応が強く肯定的に受けとめられるという傾向がみられた。
6. 否定的印象点が高かったのは「何もされなかった」対応であり、3年生においてはその群の平均値と比較して有意差があった。
7. 不安得点の低い生徒は不安得点の高い生徒に比べて肯定的な印象を多く持っており、逆に、不安得点の高い生徒は不安得点の低い生徒に比べて否定的な印象を多く持っていた。

謝 辞

稿を終えるにあたり、今回の調査にご協力戴きました中学校の校長先生、学級担任の先生方および生徒の皆様方に深謝致します。

引用文献

- 1) 伊藤武樹：中学生の悩み及び自觉症状とその対処行動の関連—数値化Ⅱ類を用いた検討—, 学校保健研究, 36, 145-157, 1994
- 2) 識名節子, 天願優子, 平山清武, 他：思春期の学校や家庭に対する意識と身体症状や悩みについて—数値化Ⅱ類による解析—, 第43回日本学校保健学会講演集, 264-265, 1996
- 3) 石原昌江, 宮家美由紀, 池田知美：保健室でのこどもの行動と養護教諭の対応に関する研究, 岡山大学教育学部研究集録, 110, 53-76, 1999
- 4) 瀬口真幸, 中村和彦, 森 昭三：保健室を防げる子どもと養護教諭の関わりⅠ, 第40回日本学校保健学会講演集, 203-204, 1993
- 5) 日本学校保健会：保健室利用状況に関する調査結果の概要(平成8年度調査結果), 新学校保健実務必携〈第六次改訂版〉, 175-190, 第一法規, 東京, 2000
- 6) 小倉 学, 椎名雅子, 伊藤まゆみ, 他：シンポジウム・保健室にくる子どもとその問題と対応, 第27回日本学校保健学会の記録(1), 学校保健研究, 23, 52-67, 1980
- 7) 高田公子：保健室を防げる子どもの実態とその対応—中学校一, 学校保健研究, 27, 11-14, 1985
- 8) 出井美智子, 高木廣文, 飯長喜一郎, 他：全国保健室利用者実態調査(第3報)—公立中学校の結果—, 第39回日本学校保健学会講演集, 293, 1992
- 9) 飯長喜一郎, 高木廣文, 飯田澄美子, 他：全国保健室利用者実態調査(第5報)—まとめ—, 第39回日本学校保健学会講演集, 295, 1992

- 10) 盛 昭子：救急処置における児童のヘルス・ニーズの明確化について，学校保健研究，26，9-14，1984
- 11) 小倉 学，中村悦子：保健室における養護教諭の対応の実態—来室状況・要因・相談的対応を中心に—，学校保健研究，29，523-529，1987
- 12) 植井弘子，天野洋子，糸谷外代子，他：養護教諭の行う相談活動 第一報 子ども全体を見渡しての初期対応，第42回学校保健学会講演集，311，1995
- 13) 菊地寿江，大橋好枝，大谷尚子，他：養護教諭の相談活動に関する分析的研究 その2—保健室来室者への個別対応の実態（その2・継続対応の事例）—，第42回日本学校保健学会講演集，309，1995
- 14) 大原榮子，竹田由美子，大谷尚子，他：相談にかかわる養護教諭の力量形成 第3報—日常事例の分析から—，日本養護教諭教育学会誌，3，47-59，2000
- 15) 塩田瑠美，木幡美奈子，森田光子，他：相談にかかわる養護教諭の力量形成 第4報—長期にわたる支援事例の分析から—，日本養護教諭教育学会誌，3，60-71，2000
- 16) 吉田あや子，大谷尚子，森田光子，他：相談にかかわる養護教諭の力量形成 第5報—力量形成をめざした養成教育の実態—，日本養護教諭教育学会誌，3，72-86，2000
- 17) 森泉清香，大谷尚子：今日の相談活動における「連携」の特徴—「連携」を養護教諭養成教育に取り入れる際の留意点—，日本養護教諭教育学会誌，3，96-106，2000
- 18) 竹田由美子，森田光子，大谷尚子，他：相談活動にかかわる能力育成の実態—養護教諭養成機関対象調査の結果より—，日本養護教諭教育学会第8回学術集会抄録集，62-63，2000
- 19) 塩田瑠美，大津一義，本多英子，他：ヘルスカウンセリングの効果的な進め方—ケーススタディーを通して—，第42回日本学校保健学会講演集，306，1995
- 20) 中根浩美，剣持智恵，森田光子：養護教諭の行うヘルスカウンセリング（健康相談活動）のアセスメントに関する研究（第1報），第46回日本学校保健学会講演集，276-277，1999
- 21) 高林智子，崎下由香，荒木田美香子：養護教諭の複数配置が中学校のヘルスカウンセリング活動に及ぼす影響，第46回日本学校保健学会講演集，278-279，1999
- 22) 崎下由香，高林智子，荒木田美香子：経験豊かな養護教諭のヘルスカウンセリング技術—子どもの心の問題への対応—，第46回日本学校保健学会講演集，280-281，1999
- 23) 小出彌生，岡田弘子，郷木綾子，他：高校生を対象とした学校生活と保健室に関する調査研究—特にいじめ問題を含む悩みについて—，第43回日本学校保健学会講演集，202-203，1996
- 24) 木幡美奈子，庄司一子：中学生の保健室および養護教諭に対するイメージと保健室利用に関する研究，教育相談研究，33，25-39，1995
- 25) 盛 昭子，早川三野雄，小山美和：保健室来室児童生徒への養護教諭の対応に関する研究—児童生徒の望む養護教諭の対応—，弘前大学教育学部紀要，69，195-205，1993
- 26) 大橋好枝，大谷尚子，菊池寿江，他：養護教諭の相談活動に関する分析的研究—保健室来室者への個別対応の実態（その1．来室者の内訳と概要）—，第42回日本学校保健学会講演集，308，1995
- 27) 中里克治，水口公信：新しい不安尺度STAI日本版の作成—女性を対象とした成績—，心身医学，22，108-112，1982
- 28) 長島貞夫，藤原喜悦，原野広太郎，他：自我と適応の関係についての研究（1）—Self-Differential 作製の試み—，東京教育大学教育学部紀要，12，84-91，1996
- 29) 飯田澄美子：シンポジウムⅡ保健室での心身の健康問題への対応—心の問題への対応を中心に—，学校保健研究，29，113-118，1987